

等々……ざい分ヒドイ非難である。

経済大国になった今日、だからこそ本当

の「企業メセナ」が日本に問われている。

ひるがえって沖縄はどうだろう。年々経

済の地盤が安定の方向に向かっているよう

に思われる。昨今は沖縄でも企業メセナが

叫ばれるようになった。沖縄でもメセナは

育つだろうか？ 関心のある所だ。ともあ

れ、文化発展のカギは企業の文化支援にか

かっている。

「一枚の絵は一冊の小説に値する」と言

われる。つまり、作家の一枚の絵にその

作家の生きた時代が表現され、社会的状況

や思想・哲学が美意識として反映されると

言う事である。

政治的イデオロギーや利害を超え、その

時代の人間の営みが「美」として一枚の絵

に定着される由だ。

だから十九世紀の王侯貴族や今世紀の企

業家たちが目の色かえて美術品をコレク

ションしたのである。

まさに芸術家は静かな時代の証言者、そ

して一枚の絵はその時代の人間の証しと言

える。



幸地 学

上原誠勇氏

一九四七年南風原町生まれ
画家を目指し東京で青春時代を
過ごしたのち、沖縄へもどり郷
土月刊誌「青い海」の総務部長
を担当。
一九八一年「画廊沖縄」設立。
一九九〇年若手現代作家の企画
展のための空間「WORK II」
をオープン。美術情報誌「The
Gallery Voice」誌を定期発行する
など沖縄美術界で精力的に活動
している。